

はじめに

なぜ今、生け花なのか。

日本人は、元来自然とともに暮らしてきました。国土の7割を山が占め、四季折々の自然に恵まれた環境の中で、農耕民族として暮らしてきた私たちの祖先は、自然と自分たちの生活に植物を取り込んで生きてきました。

平安時代、貴族の間で「花をめぐる」という風雅な遊びも広がり、「花を生ける」ということが行われるようになりました。室町時代には、茶の湯とともに「生け花」として発展してきました。生け花には、こうした先人たちの心、知恵、技術がぎっしりと詰まっています。

今、経済至上主義的な考え方が広まり、刹那的な発想をする人がとても増えてきているように感じています。しかし、私たち日本人は、もつといてしまえば人類は皆、自然とともに生きてきたのです。花を美しいと思う心を失えば、豊かな心も失われます。

私自身、こんなことがありました。

長女を出産したときに、1年以上生け花から離れていました。最初のうちはとにかく慣れない育

児に忙殺され、何も気づかなかったのですが、久しぶりに子どもをおぶって稽古をつけてもらったときのこと。花を生けるときは、一本一本の枝や花と向き合う集中力が必要ですが、その集中力が子育てや生活の雑念から解放してくれました。言いようがない幸福感に満たされ、今でも忘れられないほど新鮮な感覚でした。母も華道家でしたから子ども頃からお花があつて当たり前という環境で育つてきたので、花のある生活が素晴らしいという自覚すらなかつたのですが、花のない生活がどんなに自分を苦しめていたのか、と思つたほどでした。花に触れるだけで、ここまで救われるものなのか、と。花は何も語りませんが、そつと私たちの心に寄り添い、癒やしてくれます。

また、生け花は、実は非常に合理的にできています。自然の美を表現するうえで、無駄なものはそぎ落としていく、というのが基本的な考え方です。よく西洋のアレンジメントは「足し算」、生け花は「引き算」にたとえられますが、枝や花を生けるときにも無駄な葉や小枝は切り落とししていきます。どこが必要でどこが必要でないのかを見極めるには、かなりの集中力と熟練を要します。自然の中に育つた枝や花は、一つとして同じものはありませんから、毎回毎回生けるたびに、今、目の前にある花と向き合つて、決めていくことになります。

この見極めの力がついてくると、絵の見方や音楽の聴き方なども変わってきます。どのような分野の芸術作品でも、一つの作品の中に不要な要素というのはまったくなく、すべての要素が「必然」であることに気づけるからです。一見不要と思われるものでも、描き手が何を意図して描いたのか、あるいは何も描かずに空間を置いた意図はなんなのか？ただ漠然と「きれいだ」と思っていたものが、細部に目が届き、作者の意図を想像するということができるようになってきます。こうして、ものの見方が少しずつ変わってきて、興味や関心が広がり、あなたの品格を築いていくのです。

日本人として受け継がれてきた生け花を学ぶことで、日本人らしい美的感覚を取り戻し、花を愛してくださる方が一人でも増えてくれること願ってやみません。

そして、その先できっと、ステップアップした自分に出会えることでしょう。

さあ、生け花の世界をちょっとだけのぞいてみましょう！